

# 幼児期の

## 言語問題児



笹沼澄子

### 言語障害の種類と障害児の数

アメリカの分類法に従いますと、子どもにみられることばの障害には、次のような種類があります。

大多数の子どもは、小学校へ入学するころまでに、ほぼいちんまえのことばが話せるようになります。つまり、言語発達の基礎工事が一応完成して、ことばを通じての感情や意思の伝え合いが、日常の生活にさして不自由なくできるようになるわけです。

ところが、ことばの発達が、このように順調にすすまない子どももいます。いろいろな理由のために、ことばの病気になる子どもたちです。こうしたことばの病気には、どのような種類があるのでしょうか。また、このような子どもたちは、どのくらいいて、どんな困り方をしているのでしょうか。ことばの不自由な子どもたちの問題を、少しでも軽くしてあげるために、わたくしどもは、どのようなことに心がければよいのでしょうか。

- | 障害の種類          | 頻度    |
|----------------|-------|
| 1. 構音障害（発音の異常） | （三・〇） |
| 2. 吃音（どもり）     | （一・七） |
| 3. 声の障害        | （一・二） |
| 4. 口蓋裂によるもの    | （一・一） |
| 5. 脳性まひによるもの   | （一・二） |
| 6. 言語発達のおくれ    | （一・三） |
| 7. 聴覚障害によるもの   | （一・五） |

計

（五・〇）

この表のかつこ内の数字は、それぞれの障害の頻度を示したものです。日本においては、まだこれほど詳しい調査はなされていませんが、合計5%という数字は、ほぼ当を得たものと考えられます。つまり、百人の子どものうち約五人は、なんらかのことはの障害をもっていることが推定されるのです。これは、盲児、ろう児、肢体不自由児などを、全部あわせた数よりも、はるかに多い数です。

#### △ことばの障害をもつ子どもとの問題▽

しかも、このような子どもが直面しなければならない問題は、意外に深刻で、複雑です。ご存じのように、わたくしどもが社会生活をしていくうえに、ことばを用いての意思の伝達ということは、きわめて大きな役割を果しています。したがって、ことばの障害をもつことが、本人に対して、いかに重大な、多岐にわたる影響を与えるものであるかは、容易に想像ができません。

たとえば、ことばがうまくしゃべれないということは、知能や性格の問題と誤解されやすく、事実、そのように扱われてきた子どもの数は、けっして少なくありません。また、こうした誤った扱いをうけてきたために、二次的に生ずる諸問題、たとえば性格や行動上のゆがみ など見のがすことはできないでしょう。おかあさんや先生方の訴えをみても、こうした子どもが、ともすると、「無口」、「ひっこみ思案」、「自信がない」、「劣等感が強い」、「乱暴」、「攻撃

的」、「気が散りやすい」、「不注意」、「おちつきがない」などの批判をうけやすいことがわかります。しかも、こうした傾向は、学令期にたつすると、ますます表面化し、学業面においても、「学習意欲に欠けた」、「成績のかんばしくない」子どもになりやすいのです。

#### △ことばの発達に必要な条件▽

ことばの障害をもつ子どもを、どう扱うかという問題にはいる前に、まず、正常なことが発達するために必要なくつかの条件を知っておくことがたいせつでしょう。このような条件がそろった場合に、はじめてことばは、一定の順序と段階に従って成長していくのです。しかも、話すということは「おすわり」や「はいはい」と違って、教えなくてもひとりでもに発達する機能ではありません。生後六、七年間にわたる、はげしい「学習」を通して、習いおぼえるものなのです。したがって、ことばの発達に必要な条件とは、ことばの学習が順調に行なわれるための条件、ということにほかなりません。こうした条件を整理しますと、次の五つにまとめることができます。

1. 知能
2. 聴力
3. 発声・発語器官の運動機能
4. 環境的因子
5. 情緒的因子

これらの条件は、いずれも、ことばの発達にとつて、もっとも基本的なものです。したがって、ことばの学習途上のある時期に、このうちのどれかに、多少とも問題があった場合は、ことばの発達はなんらかの影響をうけることとなります。

たとえば、重症の精神薄弱児は、ほとんど必ずといってよいほど、ことばの発達のおくれを伴っています(1)。また、生まれて間もないころから、つまり、言語習得期以前から、一定以上の聴力障害がある子どもは、周囲の者が早期にそれを発見して、適切な教育的配慮をしてあげないかぎり、正しいことばを学習することはむずかしいでしょう(2)。発声・発語器官の運動機能に障害があるために、ことばの問題が生じる代表的な例としては、脳性まひの子ども言語障害があります(3)。さらに、知能、聴力、運動機能などが、それぞれ全く正常であっても、家庭でのことばの環境に問題がある場合は、発達のおくれや、どもりなどの言語障害をひきおこしがちとなります(4)。また、子どもにとつて耐えがたい心理的圧迫や、情緒的不安が長く続くような場合も、やはり、すこやかなことばの発達は望めません(5)。

しかも、問題の起因をなす条件は、たった一つであることよりも、むしろ、二つ以上が複雑に重なりあっていることのほうが多いようです。これは、障害の原因を追求するさいに、じゅうぶんに注意すべき点でしょう。

### △問題の扱い方の実際▽

ゆみ子ちゃんは、二才のお誕生日が過ぎたというのに、ことばらしいことは、ほとんど話せません。三才のあつし君は、お隣に住んでいる同じ年のえみちゃんにくらべると、お話しのかたがなるとなくたどたどしく、発音もはつきりしません。

いったい、この子たちのことばには、問題があるのでしょうか。あるとしたら、どんな性質の問題で、原因は何にあるのでしょうか。このままほうっておいても、そのうちに普通に話せるようになるのでしょうか。それとも、なにか特別の治療や訓練を行なう必要があるのでしょうか。こうした問題に突きあたって、いろいろと心配をされているおかあさんや先生が、きっと大勢おられると思います。

このような場合、いちばんよい方法は、あれこれと迷わずに、早く、ことばの専門家に相談してみることでしょう。こういう専門家は日本にはまだ数が少ないようですが、近い将来には少しずつ増員されて、みんなが気軽に相談に行けるようになることが期待されます。ではこういう専門家の仕事を簡単に紹介しておきましょう。

1 まず最初に、おかあさんとの面接を通して、子どもの詳細な生育歴をとります。子どもがどのような素因をもって生まれ、周囲の環境と、どのような相互作用をいとなみながら現在に至ったか。とくに、ことばの学習に必要な五つの条件はそれぞれどの程度に充

たされてきたか。もし、それらのどれかに問題があったとしたら、それは、子どもの言語発達途上のいつごろのことで、どのくらいの間続いたか。それに対して、両親はどのような態度で扱ひ、その結果、子どもはどのように変ってきたか。

こうしたことがらについての話し合いを通して、障害の過去の歴史をふりかえり、さまざまな要因が、相互に、どのように関係しあって現在の問題をつくりあげているかを、掘り下げるわけです。

2 次の仕事は、子どもの現在のことを正確に調べることで、そのためには、種々のことばの検査をしたり、子どもといっしょに遊びながら、ことばの観察をしたりします。そして、正常なことばの発達の基準と照らしあわせて、どの面に、どのような問題があるかをつきとめます。

3 心理検査、聴力検査、耳鼻科的検査、その他の医学的検査を必要に応じて、それぞれの専門家に依頼します。

4 1、2、3で得られた結果を総合的に検討し、④ことばの障害の種類と重症度の診断、⑤障害の原因となった種々の要因の診断、⑥予後（適切な処置によって、問題が今後どの程度まで改善されるかということ）の判定などを行ないます

5 障害の要因のうち、④医学的・心理的処置の対象となるものは、それぞれの専門家に依頼します。⑤環境調整、⑥言語訓練などによって改善しうる見込みのあるものは、その治療計画を立て、実際

の治療にとりかかります。

以上が、ことばの専門家の仕事の、あらましでした。これを見て、ことばの障害を扱うにあたっては、きわめて慎重な態度と、専門的な知識が必要なおわかりのことと思います。もしかか、誤った診断や治療を行ないますと、どういふことになるでしょうか。問題をわざわざこじらせて、とりかえしのつかない損失を招くことにならないともかぎりません。

### △問題の誤った扱い方の例▽

#### 例1

たとえば、三才前後の子どものことばには、「つまずき」や「ときれ」が、たいへん多いのが普通です。とくに、興奮したときなどは、「あー、あのねー、ゆ、ゆ、ゆきがねー、ふーってるよ」といふぐあいに、この傾向が目たつてきます。ところが、こういう話し方を聞いて、「どもり」にちがいないと、しろうと判断するおかあさん方がいます。このようなおかあさん方は、いったん子どもの話し方がおかしいと思いはじめると、心配のあまり、絶えず聞き耳をたてて、ほんの少しのつかえに対しても、「ゆっくりと、あわてないでね」、「もう一度おちついてね」、といった注意をするようになります。ところが、このようなことがたび重なりますと、子どもはやがて、話すことに対して、それとない不安を感じはじめます。その結

果、かえってひどくつかえるようになり、ついには、ほんとうの「どもり」になってしまふことがあるのです。これは、正常に「つかえ」たり、「とぎれ」たりしながら話していた子どもを、誤った診断と、誤った指導法によって、わざわざことばの病気にかからせしてしまう例と言えましょう。

## 例2

「耳が遠い子どもを発見することは、意外にむずかしいことです。が、神経性難聴の場合は特にそうです。こういう子どもの特徴は、大きなもの音や話し声は聞こえるけれども、ことばの「聞きわけ」ができない、という点にあります。ですから、「ことばの発達のおくれ」とか、「発音の異常」というような、ことばの問題がおきやすいことはもちろんですが、そのほかに、「ほんやりしている」、「注意散漫」、「知能がおくれているらしい」といった評価をされ、肝心の難聴には全く気づかれないことが少なくありません。そして、「そのうちにどうにかなるだろう」とか、「時期がくれば……」といった安易な考え方をしているうちに、ことばの学習にとってかけがえのないせいせつな時期が、むだに過ぎ去ってしまうことになってるのです。これは、なんとも残念なことです。

## △ことばの衛生▽

日ごろから健康管理の行き届いている家庭からは、病人が出にく

いものです。それと同じように、ふだんから、ことばの衛生の守られている家庭や幼稚園の子どもは、ことばの病気にかかりにくいことが知られています。ことばの学習に必要な五つの基本条件のうち二つ、「環境的因子」と「情緒的因子」とは、ことばの衛生そのものにほかなりません。そして、からだの病気がそうであるように、ことばの病気も「予防」することができのです。事実、幼児期に発生することばの病気の大半は、周囲の人々の心がけしだいで、防ぐことができるはずだといってもよいくらいです。

また、いったん病気になってしまった場合に、その悪化を防ぎ、問題を早く改善させるためにも、こうしたことばの衛生面の配慮ということは、不可欠なものとなってきます。その意味で、子どもとじかに接触する機会のいちばん多いおかあさんや先生方の果す役割は、この上なくたいせつなものと言えましょう。次に、家庭や幼稚園でぜひ心がけていただきたいことからいくつかをあげてみましょう

1 お話しをするこのよろこびを経験させましょう。ことばの衛生という点からみて、なによりもたいせつなことは、お話しの好きな子どもに育てあげることです。それには、周囲の人々がまず「おしゃべり」になり、お話しを心から楽しむ雰囲気をもりあげることが肝心でしょう。お話しをすることが、いつも快い経験と結びついているようならば、子どもはもつともっとお話しをしたくなるでしょう。

2 よい聞き手になりましょう。お話しが好きなき子どもに育てる

ための、いちばん確実な方法は、周囲の聞き手が、子どもの話しかけに対して、いつもよろこんで反応し、あいづちをうってあげることです。たとえ、発音がはっきりしていなくても、ことばのつながりがおかしくても、その場でけちをつけるようなことはせずに、いったんは、心から受け入れてあげましょう。たとえどんなに忙がしくても、おちついて、しんぼう強く、本気になって聞いてあげましょう。

3 ことばの刺激をじゅうぶんに与えましょう。いろいろな機会をとらえては、子どもの年令や興味に合ったことばの刺激を、あふれるほど注いであげましょう。子どもの好きなお話しをしてあげたり、本を読んで聞かせたりしてください。子どもといっしょに遊びながら、その場にふさわしい適切なことばや言いまわしの使い方を、それとなく示してあげてください。ことばを使うゲームなどを、遊びの中にじょうずにとり入れてみるのもよいことです。

4 ことばのしろうと矯正は危険です。「あのねー、おしゅなばでねー」と威勢よく話しかけてきた三才のおとる君に対して、「あら、おしゅなば」ではないでしょ。おすなばよ。お、す、な、ば」と言ってみて聞かせるおかあさんがあったとしましょう。こうしたことがたび重なりますと、どういうことになるでしょうか。子どもは、せっかくな話したいと思っていた意欲をくじかれ、お話しをすることがいやになってしまうのではないのでしょうか。それに、三才の子どもにとって、「ぎ行」を正しく発音することはまだ無理な場合が多い

のです。したがって、こうした注意のされ方をしても、何をどう直せばよいのか途方にくれるばかりで、話すことに対する漠然とした不安や気まずさだけが印象づけられる結果に終りがちです。子どもやその他のことばの問題が、こうしたことの積み重ねによっておこることは、けっして珍らしくありません。

5 豊かな生活体験をさせましょう。子どもは、日々の生活体験を通して、ことばを学んでいきます。実際に見たり、聞いたり、やってみたりすることによって、ことばの内容も充実し、成長していくのです。なるべく巾の広い、変化に富んだ経験させるようにくふうしましょう。同年令の友だちと遊ぶ機会をつくってあげること

もたいせつです。

6 子どものことばの発達についての正しい知識をもつように、日ごろから勉強しておきましょう。機会をみては、いろいろな年齢層の子どもたちのことばを、よく観察してください。こうして、特定の子どものことばが、標準に近いものか、またはなみはずれて変っているものかということの、だいたいの目やすをつけられるよう

にしておきましょう。もし問題が疑われる場合は、ときを移さずに専門家に相談しましょう。適切な時期に、適切な治療を行ないさえすれば、ことばの病気は必ず改善するものです。

(国立ろうあ者厚生指導所言語課)